



宮崎に寄せて 「語学」

ぼくは大学に入ってすぐハインリヒ シュリーマンの「古代への情熱」を読んだ。高校生のときの自分の受験勉強の骨格だった旺文社の大学受験ラジオ講座のある先生が雑談の中でこの本を薦めていたからだ。影響を受けやすかったぼくはこの本の感化で語学への情熱を持った。このドイツ人著者はミケーネやトロイの遺跡の発掘者として有名であるが、同時に超人的努力で十数か国語をマスターしたことで知られている。ぼくは彼の自伝ともいえるこの「古代への情熱」を読んでいくうちに自分も彼のように多数の外国語をマスターしようと思った。そして最初に制覇しようと思ったのは、すでに高校生のころからかじり始めていた、そしてぼくのその頃尊敬していたベートーヴェンそしてこのシュリーマンが母国語としていたドイツ語であった。

したがってぼくはNHKのラジオやテレビのドイツ語講座を努めて聞いたり見たりした。（このときのひとりの先生が小塩節教授で、後年にぼくは練馬区に住むこととなり、そこで孫がかよった幼稚園の園長をされていた人が教授によく似ていると思って、インターネットで調べてみると同一人物だった。それである日彼に自分がかつて先生のラジオ講座の生徒であったことを話すと喜んでくださった）。さらに大学のドイツ語の授業でも — まったく新しいものを学ぶ時に生じる初心と呼ばれる向学心にも助けられて — 真剣な気持ちで先生の講義を聞き、いつかはドイツ語ではクラスで、いや大学内でも誰にも負けないだけの実力を身につけるぞという気概を胸に抱いた。ドイツ語の辞書を暗記することも計画した。しかしなかなか本格的勉強を始めなかった。なかなか自分の思い描いていたシュリーマン的没頭の生活を開始できなかった。その原因は、多くの教科を同時に学習せねばならない時に一つだけに没頭するということの難しさにあった。大学のカリキュラムは、多方面にわたる教養を身につけるためには都合よく組まれているが、何かをとことんまでマスターしようとする時、多くの履修しなくてはならない教科の負担が重くのしかかってくる。大学は自由の空気が満ちている反面このような拘束も厳然と存在している。したがって何かに打ち込む者にとって受講科目全部に落第しない成績を取るということは非常に難しい。ぼくは一年生の時たくさんある受講科目のテストで合格点を取ることに精一杯で、他に何かに没頭する余裕はなかった。ドイツ語を比較的一生懸命勉強したとはいえ、それは語学をマスターする時に必要ながむしゃらな努力にはとてもとどかないものであった。

一年目はこういうことで、一般教養と専門科目の単位の取得率は良かったが、それ以外で注目に値するようなことは何一つできなかった。だからこの一年目はぼくの6年間の宮崎生活のうちで最も収穫の少ない年であった。もっともあの受験勉強に追いまくられた高校時代のあとの一年間の休養期とみるなら収穫の少なさも大目に見るべきであろう。しかしそうかといってぼくは高校時代が有意義で収穫の大きな時期だったとも思っていない。多くのことを学び覚えたが青春の輝きが伴わなかった。少しでもいい大学に合格することだけが目的で、個性を殺したロボットのよ

うな勉強生活から真に意義のある収穫を得ることは難しい。

このようなことを考えると、大学の一年目はむしろぼくがロボットから脱皮して真に自律できる人間になるための準備期間ともみることができる。自分で目的を立て、自分で方法も計画し、自分ひとりでそれを実行できるようになるためには一年間くらいの模索の時期も必要であったろう。

そんな時に読んだ北杜夫の「ドクトルマンボウ青春記」はぼくに自分が今青春という貴重な時期のまっただ中にいるのだということを自覚させてくれ、ただなんとなく生きていってはいけないのだという気持ちにさせてくれた。

周りを見ると、みんなそれぞれそれなりの特長のある個性的大学生活を営んでいたが、ぼくを感心させぼくの生活に影響を及ぼすほどの人はほとんどいなかった。その数少ない人たちの中でも特に強い影響をぼくに与えたのは教育学部特設音楽科の東氏であった。彼はブラスバンドの一年先輩でトランペッターであった。彼の練習熱心さはシュリーマンの言語をマスターする時の超人的努力はかくあったろうかと思わせるものであった。そしてその真剣な練習の成果は彼のトランペットの美しい音色となってぼくを感動させあこがれを抱かせた。ぼくは一年生の終わり頃にメロホーンからトランペットに楽器を替えたので東氏の弟子といえないことはなかった。彼のトランペットに打ち込む真剣な姿はぼくの中で芽生えつつあった向上精神をちょうど太陽が植物の成長を促すように高めた。ぼくも頑張ろうと思った。彼の熱心さを見ていると努力すれば人を感動させる技術を身につけることができると確信できた。それはあたりまえのことではあろうが、実際に彼が身近でそれを実証してみせてくれて初めてその確信は行動へのエネルギーとなってぼくを急き立てた。

ぼくは彼のテクニックと音色を追い抜こうと決心した。彼は一度ぼくの口の形がトランペットを吹くのにとても適していると言ったことがあったので、それに励まされてぼくは猛練習を始めた。そして初心者の常として練習すればするほど上達して自分でも信じられないほどうまく吹けるようになった。そしてこの時の自らの経験がのちにぼくが英語に打ち込んで猛勉強する際、「努力は結果を生ずる」という確信の大きな支えとなった。

東氏はぼくにトランペットへの情熱をかき立ててくれたが、その情熱はぼくの合理的かつ客観的考えによって次第に冷めていった。ぼくは自分が専攻しているのは化学であり、東氏のトランペットに相当するものはぼくにとっては化学という学問ではないか、と考えたのである。それでぼくは化学を中心として自然科学の本をたくさん読もうと決心した。それまでは読書は文学作品に偏っていたが、文学と化学関係の本を交互に読むことにし、暇な時間は図書館で「自然」や「ロジスト」という理科系の月刊誌を読んだ。

しかし何かに打ち込もうとする時、それがただ単に合理的、客観的動機によるものであったら、そういう専念における本来の姿である忘我の境地には達し得ない。努力の生活にはつきものの苦しみと辛さを忘れさせてくれるあの忘我の境地に達し得るための大切な条件は自分が打ち込もうとすることに強い魅力と愛着を感じていること、すなわち主観的動機によるものでなければならない。そういう条件が弱ければ苦しみと空しさが生活を重苦しくするだけだ。

ぼくの場合、化学、もっと一般的には自然科学に魅力を感じないわけではなかったが、音楽、文学、語学にぼくが感じていたような強い愛着、そして欲求を持つことはできなかった。だからどんなに化学の本を熱心に読んでいてもそれに引き込まれて時間の過ぎるのも忘れるというほどのことはなかった。化学はぼくにとって、東氏にとってのトランペットのような存在とはなりえなかった。こういうことでぼくの専門学科である化学への取り組みは次第に卒業するために必要な最小限の勉強をするだけ、ということになっていった。

ぼくが化学から少しずつ遠ざかっていき、ドイツ語でなく英語を自分が打ち込むべき語学として選ぶまでの過程でエスペラント語との出会いを無視できない。エスペラント語がぼくの外国語の興味の対象をドイツ語から英語に向ける助けとなった。もしぼくがドイツ語に打ち込んでいたらその後の人生はかなり違っていただろう。ドイツ語は国際語でないため英語ほど利用価値がない。ドイツ語ができるからといって就職において有利になることはあまりない。そして英語を通じてぼくは多くの友と知り合いになれた。ドイツ語だったらもっと孤立した勉強生活になっていただろう。このようなことを考えるとぼくが英語を選んだことは適切であり賢明であった。英語を身につけることの重要性が叫ばれ、英会話学習がブームになりつつあった時勢を思えば、ぼくが英語を選んだのも必然的なりゆきであったとも考えられる。ドイツ語学習を本格的にスタートしていたとしても、またエスペラント語との出会いがなくて世界語という思想に触れることがなかったとしても、ぼくは遅かれ早かれ英語に転向していたであろう。

それにまた次のようなこともぼくは考慮した。東氏がトランペットを始めたのは中学生の時であった。以来彼はひたすら練習に励んだ。そして彼はプロになることを決心し音楽科に入った。このような経歴を持つ彼に比べ、ぼくの場合ドイツ語はまだかじり始めたばかりのものであった。今からドイツ語を一生懸命に勉強して彼のトランペットのテクニックに匹敵できるくらいのをマスターすることは不可能とはいえなくても相当長い時間がかかる。それに語学は楽器と似て練習を始める時期が早ければ早いほど本物になり易い。ぼくは自分の年齢を考えて、もしかしてドイツ語は今からやったのではもう手遅れなのではなかろうかと疑った。それなら何であれば今からでも遅くはないだろうか。ぼくはすぐ英語だと思った。英語ならぼくも中学生の頃から学んできており成績も比較的良かった。これなら今から真剣になってやれば東氏のトランペットに負けられないだけの域に達せるのもそれほど遠い夢でもないだろう、と思われた。

こうしてぼくは英語について焦点を絞った。ぼくはスタートラインに立った。ぼくの行くコース

は決まった。そしてこのレースはぼくのそれ以後の大学生活を貫き、今に到っている。

スタートを切ると当然のことながら化学が大きな障害となった。一般教養はともかく専門の化学をほったらかすことはできない。落第は好ましくない。幸い授業や実験で用いられたテキストは英語の原書が多く使われていたので英語と化学の勉強が両立する部分もあった。しかし、やはり興味の薄れていった化学の勉強はおろそかになっていって、ぼくは授業から落ちこぼれていった。物理化学等の学習に必要な数学も2年生の冬頃から授業についていけなくなっていた。のちに物理化学実験をパスするのに3年もかかってしまい、2年間留年することになるのもこの頃のこと。この状況の必然的結果ともいえる。ぼくは化学のルールからそれていた。しかし脱線していたわけではない。ひとつには化学の原書テキストを英文読解のための読本として愛用したからだ。Fieser & Fieserの有機化学のテキスト、とGladstoneの物理化学のテキストは、序文から丁寧に読んで、初めて英文の読解に自信を持つことができるようになった。特に前者は、偶然に訳書を東京の古本屋で手に入れていたので、原書と訳本を並べて比べながら読んだ。そして日本語にはない節(*clause*)の概念を認識することができ、英作文力の基礎とした。物理化学実験のレポートを一時英語で出したこともぼくの中で化学と英語を何とか両立させたいという努力の一つのあらわれであった。したがって、ぼくは化学のルールにかろうじて載っかかっていた。そして、今振り返ると、自分の青春に輝きがあったとしたら、それはこの英語で提出した物理化学実験のレポートが真っ先に心に当たる。

こうして英語の勉強に専念すればするほど他のことがおろそかになっていった。読書は次第に減少してゆき、英文のものを少しずつ読んだ。日本語で読書することは一時期やめたこともあった。エスペラントの活動も消極的になった。ただブラスバンドは、3年生になるとある1年生のクラリネッターを好きになってしまい、練習にはほとんど参加した。

ところで話は前後するが、エスペラント語との出会いについて少々書いておこう。ドイツ語、エスペラント語そして英語にぼくが取り組んだのは、ちょうど三段跳びのホップ、ステップ、ジャンプという動作に似ている。

2年生の時のことである。ある日ぼくとクラスメイトの佐々木と藤淵はエスペラント講習会のポスターをキャンパスで見つけ教育学部のある教室に出向いた。ぼくらの他に1年生が2、3人いた。指導をするのは京都から来たという学生たちで、ぼくらに親切にエスペラント語の歴史や意義について話してくれ、丁寧にその世界語の文法や簡単な会話の手ほどきをしてくれた。こうしてぼくらは宮大にもエスペラント研究会を発足させようという話になった。ぼくはシュリーマンの影響でドイツ語から始めていくつかの外国語をマスターしようという願望を持っていたので、エスペラント語なるやがて世界の共通語となるかもしれない言語を勉強することに異論はなかった。佐々木はクラスメイトの中ではぼくとかなり親しい友であったが、すでにロシア語の勉強を始めており、やはり語学には興味を持っていた。藤淵は今振り返って思うとほとんど何の影響

もぼくに与えなかった人物であったが、出席番号がぼくの次だったこともあり、ぼくの身近に感じたクラスメイトの一人である。彼は自称プロのパチンコ師で、ある時パチンコで金をすっかりすってしまい食事にありつけなくなり空腹で夜も眠れなくなった。そして実験室でぼくに惨めな顔をして金を貸してくれと頼んだが、それほど余裕のなかったぼくは断ってしまった。その時を思い出すたびにぼくは後悔の念を覚えずにはいられない。

さてぼくらは1年生の二人も加えて宮崎大学エスペラント研究会を発足させた。ぼくらは何度か集まった。しかし集まって何をしたか今はもう思い出せない。思い出せないくらいだからおそらく雑談をして過ごただけだったのだろう。

1970年3月3日から5日まで鹿児島大のエスペラント同好会と交流を持つために鹿児島へ行った。ぼくは佐々木と1年生の甲斐とで鹿児島における会合に出席し、その夜泊まった同志の江頭宅でエスペラント誌に寄稿することを依頼され、その場で次のような原稿を書いた。この内容からもぼくの語学的関心が世界語といわれるエスペラント語より実質的な国際語となっていた英語に移りつつあったことがうかがえる。それとぼくの即興的文章力がますますのレベルに達しつつあったことがうかがえる。

『有機化学の実験でベンゼンやアニリンなどで汚れたビーカーやメスシリンダーは水で洗うよりもメタノールで洗う。というのはメタノールの方が水より蒸発が早いし、洗浄能力も強いからです。たとえばぼくの失敗談でこういうのがあります。試験管をいつものようにメタノールで洗っていた時、ふとぼくはメガネをメタノールで洗ったらきれいになるだろうなと思いついたのです。そこでさっそくメガネを取り外してメタノールをかけてみました。ところがしばらくするとメガネのフレームから白いものが析出し出したのです。驚いたことにいやな匂いもしてきました。あわてて水道の蛇口をひねって洗い流しましたが、もう手遅れでメガネのフレームにできた白い薄膜は取れませんでした。これは同僚の説によれば、レンズは無機質だからメタノールに溶けないが、フレームは大体が有機化合物だから、表面がメタノールに溶けて、残された無機質が白い薄膜を形成したのだということでした。

このようにメタノールは有機物に対し強力な洗浄能力を持っているわけです。ところがこのメタノールで洗ったガラス器具を更に速く乾かすために、我が工業化学科老朽有機実験室では、ヘアードライヤーを二つ実験室の一隅に置いておいて、学生はここへビーカーなどを持ってきて熱風を吹きつけ乾かすのです。そのためこの場所は、緊迫した実験中の学生のささやかなたまり場にもなるのです。

その時、ニトロベンゼン合成に失敗して始めからやり直すためにぼくはそこで洗った丸底フラスコをドライヤーで乾かしていました。するとぼくよりはるかに実験の進んでいると思われる友人

がやはり丸底フラスコを乾燥させにやって来た。ぼくは友に「おまえ、どこまでやったんなー」と聞くと「こんどアセトアニリドを作るとこよー」と言ったので、ぼくは「本当かー、オレなんかまだニトロベンゼンよー」と言うと、しばらく沈黙が続き、二人はガラス器具を見つめながら熱風をいろんな角度から吹きつけ、いかに速く乾かすかに熱心になった。さらにしばらくしてぼくは友人に「おまえまだクラブ何も入ってないだろう。エスペラント同好会に来てみんか」と言うと、彼は「エスペラント語ゆうて、人工語だろ、だから不自然だし暖かみのない言葉じゃないんか」「まあ、そういうところもあることはあらー」実際ぼくもそういう考えを持っていたのである。《これはしかし外国語を学ぶ初心者ならだれでも持つ違和感による錯覚であつたらう》「それに、おまえだいたいまだ世界的に認められてないんじゃないかー」「おお、まあな」実際ぼくにもそう思えたからしょうがない。「それならおまえ何のためにエスペラントやっとな」ぼくはどうも人を説得するのがへたなようだ。いつのまにか形勢が逆転してぼくが受け身になっていた。「そりゃーおまえ、何もしなかったら、いつまでたっても世界の共通語ができんでー」「そんなできんでも英語がかなりその役割を果たしているからええじゃないか」なるほど、これはぼくがエスペラントを始める前に、いや今でも根強く持っている考えである。「でもそれなら英米人に有利で公平じゃないよ」京都から宮崎にエスペラントを広めにやって来たエスペラントイストがぼくを説得するために用いた理論を借用した。ところが友は言った、「そんなこと言って、エスペラントが広まらなかつたら損をするのはおまえたちどー」「しかしなー、エスペラントやっとならヨーロッパのいろんな言葉を覚えるのに役に立つどー。人工語でも一応フランス語やドイツ語や英語なんかの単語を基礎にしているんだよ」ぼくは弱音をはいたが、頑張った。「例えば船は英語でシップだろ、それからドイツ語ではシッフだ。エスペラントではシッポなんだ」「シッポなんて犬のシッポみたいじゃないか」彼はニヤニヤしながら言った。「いや、エスペラントで優秀なことは、名詞がすべて例外なく"o"で終わることなんだ。だからシップはシッポなんだ」「ふーん、まあ君は君の思う好きな道を進めよ」と彼はぼくを慰めるように言うと、話は中断し、やがてフラスコが乾いたので彼は立ち去った。ぼくのももうすでに乾いていた。しかしぼくの気持ちはフラスコのようにからっとさわやかに乾いてはいなかった。自己矛盾を感じてしまっていたのだ。そして今また自己矛盾を感じながら筆を置く。』

こうしてぼくはエスペラント語への興味をドイツ語へのそれと共に失い、英語一色の勉強生活に入っていく。エスペラントの勉強はやめてしまうことになるが研究会の一員としての活動は消極的ながら続けた。3年になるとぼくは恋愛を経験することになり、何にも手が付かなくなり英語の勉強を保ち続けることさえおぼつかない状態だったので、他の語学は問題外であった。こうしてシュリーマンに影響されてぼくが抱いた外国語をたくさんマスターするという願望は消滅していった。

3年生になってしばらくすると、高校時代の級友信清から手紙を受け取った。彼とはそれほど親しく付き合ったわけではなかったが、やはり苦しかった受験勉強時代を共に過ごしたということで懐かしさが込み上げてきた。彼もエスペラント活動を始めていたらしく、ぼくの名をエスペラ

ントの機関誌で見つけ早速ぼくに手紙を書いたのであった。すでに英語に的を絞って勉強をしていたぼくは次のような返事を書いた。

『すばらしいお手紙、大変ありがとう。君がエスペランティストとは驚いた。君からの手紙を手にして、おや高校の同窓会か何かの通知かなと思った。ぼくは君をまだよく覚えている。というのは、今年（ぼくはブラスバンドでトランペットをやっているのだが）新入部員の中に君と良く似ている青年が入部したからだ。彼の顔を見るとすぐ君を思い出したほどだった。・・・
中略・・・エスペラントについてのぼくの考えを率直に書きたい。エスペラント語が国際語になるためには、何としても英語の勢力を克服していくことが最も重要なことではないだろうか。そのためには今英語を使っている国の人々、例えばアメリカ、東南アジアなどの人たちに、英語からたやすくエスペラントに変換できるようにエスペラント語をもっていかなければならないのではないだろうか。例えば英語の名詞の語尾を"o"で終わらせば一応エスペラント語として通用するという考えを広めたいのです。例えばAmikoなど、英語を話している人々からすれば、受け入れにくいのではないだろうか。むしろ英語のfriendをエスペラント風にfrendoとしても通用できるようにすれば、もっとスムーズに受け入れられるのではないだろうか。

エスペラントの文法が簡単で英語などよりもはるかに優れていることは誰もが認めるでしょう。ただ何とんでも新たに多くの名詞を覚えなくてはならないことにひどく抵抗を感じるはずです。英語と語源が同じでスペルが似た単語は覚えやすいが、ラテン語やフランス語、スペイン語に基づいている言葉はやはり覚えるのに苦労する。・・・中略・・・やはり地球において最もポピュラーなのは英語でしょう。だから最大限これを利用すべきでしょう。ところが残念なことにエスペランティストの多くは英語を敵とみようとしているとぼくには思える。・・・中略・・・世界語への道は何々語を世界共通語にしようという方向ではなく、むしろ世界共通の名詞や形容詞等を認め合っていくという方向が正しいと思います。例えば化学者のあいだでは、ジュネーブで決められた化合物の呼び名が世界共通システムになってい、すでにどこの国の化学者にも通じるという具合です。（後略）』

ぼくの英語学習法の特徴は必ず音を立てているということだった。英語の番組がある時にはテレビやラジオから英語が聞こえてき、それが無い時はテープレコーダーから英語がひっきりなしに流れ、そのスイッチが切られている時は、ぼくの口からたどたどしい英語がはき出されていた。ぼくのこのような方法はぼくが教わってきた楽器の練習法からヒントを得ている。上手な人の演奏をたくさん見、聞き、それを模倣すべく自分でもくり返しくり返し音を出してみる。自己流に陥ることを避けるためには、いつも適切なお手本に接していないといけない。

ぼくは自分の生活をできるだけ英語で満たしていった。やがて外出時も小型のカセットテープレコーダーにイヤフォンをつけて英語を常に聞いていた。風邪をひいて起きられなくなった時も、枕元でそのテープレコーダーは回り続けた。そういう時は神経を英語に集中できなかったが、

ぼくの脳の中でその英語の音声は混沌とした塊のようなものとなり、ぼくが眠りに落ちてもそれは夢の中でゆっくり回転していた。ぼくは農学部の食堂で食事をする時にもイヤフォンで英語を聞いていたが、さすがに同級生たちと会う工学部ではやらなかった。しかしぼくが英語に熱を入れていたことはクラスメイトたちのよく知るところとなった。

そして卒業する一年前のある日ようやく記念すべきことがぼくに起きた。その日の午後自分の部屋で昼寝をしていた。するとノックがあり襖が開き誰かが入ってきた。ぼくはねぼけまなこで "Who are you?" と言ったのだ。簡単な質問文だが、無意識のうちにぼくは英語を使ったのだ。ついにぼくの脳細胞の数個が英語による思考を開始していたのだ。やっていたことがようやく軌道に載ったという感じで、この時からぼくの英語の本格的学習が始まったともいえる。それまではぼくと英語の間に日本語という言語がどうしても介在して、ちょうど調律していないピアノを弾く時のようなもどかしさが付きまどっていたが、それからは次第に直接英語で発想することができるようになってきた。また同じころ、リスニングにも変化が生じた。NHKのラジオやテレビでネイティブイングリッシュをできるだけたくさん聞くようにしていたが、ある日、セサミストリートを見ていて——それまでは聞いた英語をいったん脳の中で日本語にひるがえらせて理解していたが——突然、英語のままで理解することができるようになった。それはまるで、それまでは白黒で映っていたセサミストリートがいきなりカラーで見えるようになったというような変化だった。

さて、ねぼけまなこでぼくに "Who are you?" と聞かれた訪問者は応用物理学科で2年先輩の迫本氏であった。彼とはモルモン教会の宣教師が教育学部で始めた英会話教室で知り合い、卒業するまで親交を保った。彼はライバルというほどではなかったが、ぼくの英語を通じての友の中では最年長で面倒見がよかったので、彼の部屋には何度も足を運んだ。彼の四畳半の部屋は、ぼくら英会話の勉強に励む仲間のたまり場となった。ぼくは彼から魚の調理法を教わり、また行列式の便利さを教えられた。英検一級に合格するととても喜んでくれ、ぼくらがいろいろお世話になった英語科の若松助教授に依頼して日航と全日空に推薦状を書いてもらうようにとぼくを説得したのも彼だった。

彼はまたぼくに初めて通訳のまねをさせたこともある。それはぼくにとって貴重な経験となった。ある日ぼくらがモルモン教会に無料英会話レッスンを受けに行った時、その宣教師に宮大に来てもらって一時中断していた英会話教室を再開することについて迫本氏はぼくに自分の言うことを通訳してくれと行ってしゃべり出した。通訳の経験のなかったぼくは面食らった。なんとか面目を保とうと乏しい vocabulary をしばってとにかくしゃべった。間違いだらけの英語であったかもしれないが役に立つことができうれしかった。一つのステップを踏んだ気がした。

また迫本氏の級友で、ぼくに多大な影響を与えた宇城氏とも英語の縁で知り合うことができた。彼も英語をマスターすることを志し、迫本氏とともにモルモン教会や大学の英会話クラスに出席

した。彼は空手の名手だった。モルモンの宣教師に自分を紹介するとき、自分は日本の学生選手権でナンバー2だったと言い、青空をバックにして飛びけりをしている写真を見せてくれた。そして、クラスが終わってみんなで校庭に出た時、彼はころがっていた石を空手で二三個割って見せて我々を驚かせた。やはり格闘技に興味を持っていた大柄の青年米人宣教師がこの技を不思議がると、彼は応用物理の学生らしく $F = mv^2$ の方程式を以て説明した。手は柔らかくともその速さで石を割ることができるというのだった。

宇城氏の様々のことに対する情熱はぼくの心を震わせた。東氏の場合は、トランペットの高い技術という媒体を介してぼくを揺すぶったが、宇城氏の場合は彼の人格そのものがぼくを揺すぶった。すきのない人だった。学業も趣味も手抜きがないようだった。英語力にしても、もしぼくと彼と同じスタートラインから出発していたとしたら先を行かれていても不思議でないような精力的な人だった。彼はすでに新旧約の聖書を読んでいて、「矛盾は見つからなかった」と言った。これを聞いただけで、自分もいずれ聖書を完読しようと思った。また彼は手相に通じていて、自分の勉強しているのは手相術ではなく統計データに基づいた手相学だと言っていた。ある時彼はぼくの手相を見た。ぼくの左手をとると右手で栓抜きを持ちその丸い尻をぼくの手相の線に沿って滑らせた。「これが生命線だ。ああ君、長生きするね」などと言いながら冷たい栓抜きを滑らせた。ぼくはその滑らかな動きに快感を覚えた。そしてずっとこのまま彼の手に触れられていたいと思った。すると宇城氏はある筋に栓抜き止めて、「ほう、結婚したら奥さんを大切にするタイプだね」と言い、こんどは右手をとるとその左手の筋と対になる筋を探した。そして宇城氏は急にぼくの顔を見、にやりとして言った「君、女性を自分のものにしたと思うとすぐ突き放してしまうところがあるだろう？」その時ぼくは「えっ？」と意外に思った。そして「そんなことはないよ」と笑いながら言った。しかしぼくはのちにこの時のことを思い返すたびにそれが外れてもいなかったと知ることになった。彼はまたオートバイを趣味にしていた。ある夜、彼の家で遅くまで我々英語青年らは語り合い、その後解散になったが、バスはもう走っておらず、ぼくの間借宿は遠かったので、彼はぼくをオートバイの後ろに乗せて猛スピードで運んでくれた。そしてぼくは初めて男性をあこがれるという思いを彼によって経験した。彼が卒業して宮崎を去った後も、近くまで行くと用もなく彼が住んでいた家のそばまでゆき、その二階の部屋の窓を眺め、感傷的になるとともに、自分の英語修行の励みとした。何しろ英語だけでは彼には負けられないと思った。（近年、思い立ってインターネットで彼を検索すると、特許発明家であり、空手あるいは合気道の世界では国際的にも著名人になっていた。さもありなん。しかし私はまだ英語力では追い越されていないようだ。

<https://www.youtube.com/watch?v=WFTHhWiZlp4>

<https://www.youtube.com/watch?v=NR0Rn422z0Y>

その他英語を通じて多くの人と知り合いになり友達になった。そしてその中の何人かは互いに英語力を競い合ったライバルである。しかしぼくが、宇城氏を別にして、最も強く刺激を受け鼓舞され続けた真のライバルは、やはり東氏をはじめとする音楽科の楽器の名手たちであった。

終わり

ショートショート「語学力上達のコツ」へ: <http://p.booklog.jp/book/103769/read>

その他

[amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro](https://www.amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro)